
 学 会 記 事

第54回下越内科集談会

日 時 平成25年11月15日(金)
午後6時30分～午後9時30分
会 場 ANAクラウンプラザホテル新潟
2F「芙蓉の間」

一 般 演 題

1 治療に難渋する深部静脈血栓症から Trousseau 症候群が疑われた1例

野澤 昌代(研)・保坂 幸男・柏 麻美
中村 則人・大久保健志・矢野 利明
田中 孔明・尾崎 和幸・土田 圭一
高橋 和義・三井田 努・小田 弘隆

新潟市民病院循環器内科

【背景】深部静脈血栓症(deep vein thrombosis DVT)は、近年、疾患への認識や診断技術の向上もあり、患者数は急激に増加している。今回、初回入院中に明らかな原因疾患を認めず、DVTの治療に難渋したことより、Trousseau 症候群を強く疑い、肺癌の診断に至った症例を経験したので報告する。

症例は58歳、男性。既往歴に特記事項なし。左大腿の腫脹・疼痛、労作時呼吸苦を主訴に近医を受診し、下肢静脈エコーにて左外腸骨静脈以下の血栓を認め、DVT・肺血栓塞栓症(pulmonary embolism: PE)の疑いにて当科入院した。初回入院時、造影CTでDVT、PEを認め、IVCフィルターを留置し、血栓溶解療法・抗凝固療法を施行した。DVTの明らかな原因疾患を認めないものの、症状や検査所見の改善を認め当科退院となった。1か月後、DVT・PEの再発にて当科再入院した。前回入院時と同様な治療に加え、数回の血栓除去

術も施行した。再度のDVTの原因疾患の精査にて、肺の陳旧性変化と考えられた陰影の生検を施行し、肺腺癌が明らかとなり、Trousseau 症候群に伴う多発静脈血栓症の診断を得た。

【結語】本症例は抗凝固療法中にも新規の血栓形成を認め、血栓性の著しい亢進より Trousseau 症候群を疑い、念入りな全身検索を行った結果、肺癌の診断に至った。深部静脈血栓症の症例において、慎重に原因疾患の検索を行うことの重要性が示唆された。

2 胸部CTにて偶然に発見された右房中隔に付着する粘液腫の1例

山田 慧(研)・有田 匡孝*
柏村 健*・小幡 裕明*・埜 晴雄*
南野 徹*

新潟大学医歯学総合病院
総合臨床研修センター
新潟大学大学院医歯学総合研究科
循環器内科学*

症例は67歳、男性。健診の胸部X線にて異常を指摘され、近医にて胸部CTを施行したところ、偶然に右房内に右房中隔に突出し辺縁整の造影される腫瘤(18×13mm)を認め当科紹介となった。冠動脈CTにて左冠動脈回旋枝に狭窄を認め、心筋シンチグラムで同部位の虚血を疑われたため冠動脈造影を施行したが、冠動脈形成術の適応はなかった。右房内の腫瘤に右冠動脈からfeeding arteryを認めた。心臓血管外科で腫瘤適切術を施行した。腫瘤は心房中隔に付着しており、一部心房中隔ごと切除し欠損部は直接吻合閉鎖した。術後は経過良好である。組織所見からは粘液腫と診断された。心臓内腫瘍の発生部位は左房に最も多く、右房内発生は4分の1となっている。また、組織型は粘液腫が最も多い。心臓内腫瘍は突然死や塞栓の可能性もあり、その診断的意義も考慮し原則手術適応であるが、本症例のように胸部CTにて偶発的に発見された右房内粘液腫は診断・治療の意味からも重要であると考え報告した。